

【資料紹介】

松本喜三郎旧蔵の生人形『西国三十三所観音靈驗記』
番付（明治十二、十四年）

一付、美術天真会『西国三十三所巡礼靈驗記』番付（明治三十四年）

細田 明宏

生人形とは、真に迫った等身大の人形を見世物興行にしたもので、松本喜三郎（一八二五―一九一）はその代表的な作者である。喜三郎が興行にかけた生人形『西国三十三所観音靈驗記』は西国霊場にまつわる靈驗譚を題材としたものであったが、多くの見物客を集めたことで知られている。

喜三郎の『観音靈驗記』は、明治四年（一八七二）二月から東京浅草奥山で、明治一二年（一八七九）二月からは大阪千日前で興行をおこなった。大阪で興行を開始するに当たり、いくつかの霊場では場面の差し替えがおこなわれるなどしている（細田明宏 二〇二〇 『近代芸能文化史における『壺坂靈驗記』ひつじ書房』。その後は内容に大きく手が加えられることはなかったようである。『観音靈驗記』は、明治一二年十一月からは京都新京極道場に場所を移し、さらにその後は各地で興行をおこなっている。

これらの興行に際しては番付が発行されている。番付には一枚刷のものと冊子体のものがある。一枚刷番付は絵で、そして冊子体番付は文章と絵で靈験譚を紹介しているが、どちらも興行の内容を窺い知ることができる貴重な資料だといえる。なお中前正志は、国立国会図書館所蔵の冊子体番付（明治一二年発行）を図版と翻刻とで紹介している（中前正志 二〇〇八「近代池坊いけばな縁起追考―生人形『西国三十三所観音靈驗記』六角堂条をめぐって」、『女子大國文』一四三、一一六〇頁、および、中前正志 二〇〇九「西国三十三所寺院縁起靈験譚関係諸資料（三）」、『女子大國文』一四五、四七―九九頁）。

ところで諸書で言及されているように、とりわけ明治一二年の大阪での興行は大変な人気を博した。番付も非常によく売れたために改版あるいは覆刻がおこなわれたようであり、さまざまな版が残されている（牧野和夫 二〇一八「生人形絵番付『西国順礼靈驗記』とその周辺―関連資料をめぐって」、『実践国文学』九三、二五―五二頁）。したがって生人形『観音靈驗記』の研究を進めるに当たっては、これらの版を比較することが有効であると考えられる。

そのため本稿では、松本喜三郎旧蔵品に含まれる冊子体番付のうち、明治一二年（一八七九）および一四年（一八八一）のものの影印を紹介したい。両者は体裁や内容がよく似ているものの異版である。これらの喜三郎旧蔵品はご遺族の元に伝わるものであり、図版の掲載をご許可くださった松本秀一氏に感謝するものである。

さて生人形『観音靈驗記』は、喜三郎の手を離れた後にも、数十年にわたって各地で興行がおこなわれた。本稿では、明治三四年（一九〇一）に美術天真会によって大阪でおこなわれた興行の際に発行さ

れた冊子体番付（架蔵）の影印をも併せて紹介したい。

一、喜三郎旧蔵の『観音靈驗記』番付（明治十二年および一四年）

喜三郎旧蔵の冊子体番付は三種類あり、発行年はそれぞれ明治四年（一八七二）、明治一二年（一八七九）、明治一四年（一八八二）である。このうち明治四年のものはすでに影印と翻刻を紹介したことがある（細田明宏 二〇二〇「松本喜三郎の生人形番付『西国順礼靈驗記』（明治四年）」、『帝京大学文学部紀要日本文化学』五一、一九一七八頁）。

本稿において紹介するのは、明治一二年および一四年のものである。両者はどちらも、縦約一八cm・横約一二cmの袋綴じで、全二〇丁の単色刷りである。裏表紙は空白であるため、影印の掲載は省略した。また明治一二年のものには外表紙がつけられているが、これも空白であるためやはり掲載していない。

本文は両者とも、上半分に靈驗譚の文章と詠歌が記載されている。ただし、明治一二年のものは詠歌を庵点（へ）で示しているのに対し、明治一四年のものは靈驗譚の文章と詠歌の間に境界線が引かれているという違いがある。

両者の相違点としてもっとも顕著なのは奥付である。それぞれ翻刻は次の通りである。

（明治一二年）

明治十二年 四月十一日御届

同年 同月 出版

定価金三錢五厘

編輯 東京府下浅草区浅草北東仲町第八番地

松本喜三郎

出版人 大阪府下西区新町通壱丁目第十一番地

田中文治郎

記者

内田正鳳

画工

久保田桃水

（明治一四年）

明治十四年 七月 五日御届

同年 十一月 出版

定価金四錢

編輯／出版人 大阪府下西区新町通一丁目第十一番地

田中文治郎

兌

松本喜三郎

二、美術天真会の冊子体番付（明治三四年）

喜三郎の『観音靈験記』は、明治二〇年頃に人手に渡ったとされる（大木透 一九六一 『名匠松本喜三郎』昭文堂書店、一四七―八頁）。その後も、大阪をはじめとする各地で興行がおこなわれた（澤井浩

一 二〇〇四 「生人形と見世物興行―大阪と『西国三十三所観音靈驗記』」
「生人形と松本喜三郎」展
実行委員会編『生人形と松本喜三郎』、一二五―一九頁。

そのうち本稿では、明治三五年（一九〇二）に大阪南地パノラマ館跡において美術天真会によっておこなわれた興行の際に発行されたと思われる架蔵の冊子体番付（明治三四年十二月三〇日発行、編輯兼発行者は井上仲蔵）を影印で紹介する。この興行に関しては、一枚刷の番付も発行（版元・井上仲蔵、日本芸術文化振興会蔵）され、また高橋好劇の「西国霊場活人形（中）」（『あのな』昭和二年十一月号）でも触れられている（http://blog.livedoor.jp/misemono/archives/cat_500511_30.html）。

この一本は縦約二三cm・横約一六cmの袋綴じで、表紙と本文に紙質の異なる洋紙が用いられており、表紙のみ多色刷りである。外題は『松本喜三郎翁作・西国三十三所順礼靈驗記・全』であり、表紙の絵画は「（長谷川）小信筆」とある。なお表紙（付01）と表紙見返し（付02）は糊付けされている。

一、喜三郎旧蔵の「観音霊験記」番付（明治二年および一四年）

表紙（明治一二）



表紙（明治一四）





見返し一才 (明治一二)



見返し一才 (明治一四)

二ウ―三才（明治二）



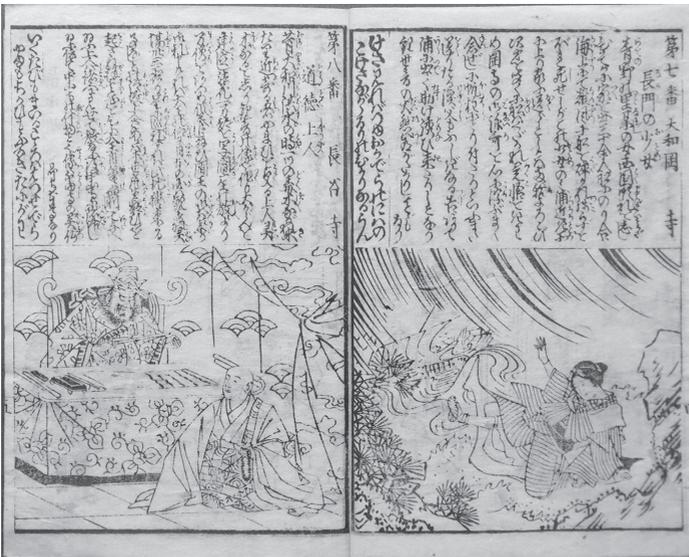
二ウ―三才（明治一四）



四ウ一五才（明治二二）



四ウ一五才（明治一四）



二二ウー三才 (明治一二)



二二ウー三才 (明治一四)





二、美術天眞会の冊子体番付（明治三四年）

抑々此西國神禮三十三所觀世音緣起活人形といふは、維新の偉傑岩倉公をして、嗚呼百物天真創業の名工と嘆せしめたる、斯道の泰斗故松本喜三郎翁が苦心慘澹數十年の歲月を経て漸く成功を告げし稲代の美術にして、往年當地を始め全國各地の都會に於て古今未曾有の大好評を博したる事は、未だ江湖の記憶に残りて現時の兒童走卒に至るまで、三十三所の活人形といへば、その名譽を身にする所なるが、以て來幾十年間、所々に觀音緣起の活人形と稱へて、世人の鑑覽に供するもありといへども、それは後述未熟の技にして到底名工の神品と比較すべきもならず、其上三十三所の幾部分のみを仕組みしに止まれば、いかでか世上の喝采を博する事を得んや、然るに此天真活人形は其後各地の歡迎を受けて翁が出生地なる肥後の國熊本の地に入しく保存せられてありしに、名譽は遠く海外に響きて、美術を真々西洋人ども、莫大の黄金にかへて、かの國に持歸らんと切に望みたれども、名品の外域に逸せん事を惜み、深く寶庫に藏めしを、此度有志の勤めに應じて順禮一番札所より三十三番打留りまで、残る方なく取揃へ遙かにこの地へ齎し來り、廣大の地を相して諸般の設備を調へ、有名なる考古家に托し、衣冠什器は勿論、細微の景物に至るまで、古代の錦繡寶玉を乘り、粹をぬき美を極めたれば、天來の神品に一層の光彩を放ち、錦上更に花を添へて諸子の瞻覽に供へまつらんとす、信仰の衆生、專門の人士はいはずもわれ、大方の諸賢子願くは、一度瀾を枉げられて、此精巧幽妙の一大美術の具趣を會得したまはん事を伏て希ふになん。

美術 天真會

西国三十三所順禮靈驗記

抑人王六十五代花山天皇は佛道に御歸依深く都を忍び出玉ひ山科の郷花山院にて御髪を剪らせ玉ひ能野權現へ參詣初遊靈夢により河内國石川寺なる佛眼上人を召連れ西国三十三所の靈場始那智山より終谷汲迄一々御詠歌の御製あらせられしより全國の道俗共に順禮の志願をおこせる輩今の世迄も廣大なる事偏に此君の御恩徳なりとぞ

うろよりもむろに入ぬる道なればこれぞ佛のみくになるべき



第一番 紀州 那智山

ふたらくやきしうつなみはみくまのくつせ
なちのおやまにひやくたきつせ

和泉式部

式部は歌道に志深く此道に達せし事々常々那智の觀音に祈り奉り遂に百人一首の中に撰まれしなり度々那智山へ參詣の折不月月のさはりありければ

はれやらひ身のうき雲のたなびきて月のさはりとなるやかなしき

と誦じたる其夜權現の御返歌に

もどよりもちりにまじわる神なれば月のさはりはなにか苦るしき

とよませ玉ふ故こころよく參詣とどげられ大悲の御利益にて文學はじり世に名高き和歌の達人となり玉ふ



第二番 紀州 組三井寺

ふるさとをばるん、こゝにきみぬでら
はなのみやこもちかくなるらん

威光上人

開基にして唐土より傳へ來るふしぎの靈佛大般若經を書寫し玉ふ時美女一人り參詣す上人何方の者と尋玉へば禮拜して清淨水の獻つばの中にかくれしが三年を経て美女又來りて微妙の法螺貝如意香爐加葉の錫杖、襪履のさくら此五品を獻じてわたくしは龍女なり上人の尊き法を聽聞いたし其功徳に依て成佛得脱をせしと禮拜し空中を四方に飛行たり是より毎年七月七日龍燈を獻するとなり

第三番 粉川寺

ちらは、のめぐみふかき粉川寺
はどほけのちかひたのもしきかな

流川佐太夫

河内の者にて獨の子大病にふし手を盡せども願なく夫婦心をなく折かち童子來り加掄をなし千手陀羅尼を教けるに苦痛を免れしが夫婦は大に悦び謝禮を出しても壹錢も受す娘の誓紙を取りて粉川の者なりとて去る本服してたづねれども知れず庵に休らひしに佛間より光明かゝり千手觀音の御手に我子のはし抵禦りいたり倍は童子此御佛に在せしと深く尊び世上に隠れなく流田むらの富女御堂建立施主となりしとぞん



第四番 和泉 榎尾寺
 みやさちやひばら松ばらわけのけは
 まきのあてらにこま子いさめる
 光明皇后

智海上人にて行法堅固の御方にて或時牝鹿来りて上人の尿をなめて孕み
 女子を産めり見給がたく村の者養育させしに七歳のとき田を畑つけ居し
 に藤原の不比等此寺に参詣のをり此女子をみるに身の内より光明を放
 つ倍は聖世音の御告これなるべしと尊んで貫ひ受けつれかへり帝に奉る
 聖武帝御寵愛後からず光明皇后と稱し佛法を深く信じ玉ひしが觀世音の
 應化とす

第五番 河内 藤井寺
 まゐるよりたのみをかくるふじわ寺
 はなのうてなにひらさきのくも

藤井安基
 大和の住人にて放逐刑見の者ある時白石の山にて鹿をとり堂に入て經机
 佛具を組板鐵齋等にして其鹿を食せしが俄に死して地獄に陥入り閻魔
 の前にひかれ大罪故苦患を受べしとある處童子現はれ彼れは我長谷寺再
 興の材木を引し善根あれば速に娑婆に返し玉へと有ければ誕生せしより
 衷心し行基の弟子となり此尊像を造り當所に安置せし故藤井寺は今の世
 々でも名高し



第六番 大和 壺坂寺
 いはをたてみつとれへてつばさかの
 いはをたてみつとれへてつばさかの
 いはをたてみつとれへてつばさかの

警者澤一
 桓武天皇御眼病の時觀自在菩薩の功德を以て御平癒在らせられしに建立
 の觀音なれば澤一といふ盲人千日の間神願を運ぶに更に御利益あらざれ
 ば本尊を恨みかへるさに後ろの方より微妙の御聲にて澤一と呼かけ
 らればつと振り向たるにふしぎや眼は明らかにて御堂かやち官女の姿
 と現じ玉ふに驚き深く三拜九拜せり其夜の夢にいまた宿業なきさるとの
 告により妻子もるども三十三所を巡拜したりける

第七番 大和 岡寺
 けさみればつとをかでのらのはのこけ
 さながらるのひかりなるらん

長門の少女
 青野の里某の女西國巡禮を志しひうかに家を出三千餘人船にのり合
 ひ海上にて難風に船を碎かれ残ちすをばれ死せしがこの少女のみ浦近き
 所に上り家に送られしかば両親よろこび次第を聞くに船はくたかれ覺悟
 をさわり岡寺の御詠歌を心に浮ぶま念せしに机料にどり付たりといふ
 まね送りたる漁夫もふしぎなる告ありて浦に出で助け勝ひ來たりしとな
 り觀世音の大悲は有がたかりしこといもななり



茅八番 大和長谷寺



茅九番 不空索堂



第八番 大和長谷寺

いくたびもまゐるころははつせでら
やまもちかひもふかきたにかは

道徳上人

昔大和川洪水の時一ツの毒木ながれ來たり近寄る者やまひを受る上人靈
木なるをしり觀音の像を作り大がらんを建立し法華一萬部を寫し餘慶王
の教により萬僧をわつめ供養し玉ひ閻王の御前に参り御禮申しければ大
王の仰に日本の國は觀音の靈場三十三所あり是に巡禮すれば此地獄に來
る事なしとの仰故上人さわらば末世に衆生疑ひを起さぬやう其證を
乞ふ大王自筆血剣して與へ玉ふ上人は諸人に見せて致玉ふ後中山寺に隱
居し玉ふ依て中山寺の什物となり像は當寺の靈佛即ち本尊なり

第九番 大和南園堂

はるの日はなんねんせうにかりやさて
みかさのやまにはるいろすやも

春日明神

此寺は藤原父嗣公子孫の繁昌を弘法大師に御尋ありければ不空絹索の像
を造す此御堂御建立の時春日明神夫人に交りて土木を運び玉ひ日雇錢を
うけ玉はず成就の後一首の歌をいひ玉ふ
普陀落の南のさしにだう建ていせさかかねきたのふじなみ
と遊され此御寺と藤原の家を永く守るべしと仰られ消失せ玉ふ依て明神
なる事をしり玉ひ傍らに社結び永世守護神と崇り玉ふなり



第十番

山城 三室戸寺

よもすがらのつきをみびるとあけみれば
うづのかはせにたつはしらなみ

第十一番

山城 醍醐寺

きやくのんもちさですくむわんなれば
じもんれいどうはたのもしきかな

結田村屋女
此娘常に佛道を尊み殊に此寺の観世音を深く信せしに或時村の者聲をおはく取來り殺さんとする所を錢をあたへて買取放生す又父親田がへしの道にて蛇が蛙を呑を見て助けんとすれど中々放さず親父たわひれに我娘を頭んと申せば忽ち放せり其夜奇麗なる若衆と化して入來る驚き娘を一間に隠す化物すでに責らんとすれど女は一心に普門品を唱へる故是に恐れて近付せず此時靈影しく來りて此化物を扱み切り娘に恩を報ず依てこの家を寺となし靈満寺と云ふ

聖賢僧正
價正は智徳勝し名僧にて昔伎の行者熊野より大峯に入り吉野へ出る峰入を始め玉ふ其後大蛇出で峰入叶はず此僧正は無双の勇僧なる故大斧を以て大蛇を退治し二度峰入を開き玉ふ其蛇の毒に當り惡瘡を生じ苦痛絶がく進路險難を誦し一心に念ず其夜の夢に觀音現し宇治の笠取山に靈水あり早く行て浴せよとの御告僧正彼の地に至りもあみせしが立處に平糴す此時異僧現れ汝觀世音の像を刻み一寺を建立すべしと靈木を與へ消失玉ふなり



第十二番 近江 岩間寺

みなかみはいづくなるらんいはまでら
きしうつなみかまつかせのかど

桃青は天下に名を得し俳家の祖なり翁常に岩間寺の観音を深く信じ何年我が道に達せんと祈誓し此所に續く國分山に閑居し三年の間住即ち此庵を幻住庵と號して一夏九十日の間に法華經の下八品を石一ッに一字づゝ書き此里の小供に小石をひろはせ持來る者へは菓子と與へてすみやかに成就して大悲の靈驗を蒙り名を一天にかいやかせしも偏に御佛の御利益なり此處に幻住庵の記を書けたり其奥に
ます頼む椎の木あり夏木立

第十三番 近江 石山寺

のちのよとねがふこころはかるくども
はどけのちかひおもさいしやま

鹿子の御影
京本願寺七世の上人石山寺へ參詣有し時其邊りより召抱られし女寵愛あり若君誕生ある布袋丸といふ御狀公常に一宗再興の旨御申合ありて六才の時鹿の子の袴袖と着せ參らせ御姿を繪に寫し一首の歌を残し石山寺に歸らせ玉ふ戀しくは尋ね來て見上唐櫛の石たつ山は母のふるさと」と詠じ歸らせ玉ふ石山寺は是迄本尊御留主七年目に御歸なされ鹿の子の御影と御兄の書玉へる六字の名號を佛の御手に御持なされたり此布袋丸は八代目通如上人はなり中興上人と共に来ること世人の知るところなり



第十四番 近江 三井寺

いでいるやなみまのつきを三井寺の

大津の町下女杉
杉は常に觀音を深く信じ毎月風雨を厭はず三井寺に参詣す傍雖は皆々笑ふといへ共少しも心をどめず其所世間にかこりの病流行しが一人も逃るゝ者なげどもこの女杉りは何の障りもなく或時一階に積上げたる薪を取らんとはしををかけて上りしに薪くづれ落ち梯子をれて眞滿鐵に石臼の上へ落て上に夥多の薪落重り骨身も碎ける有様なるに何のけがもなかりしゆる餘り不思議と身内をみるに如意輪觀音の小髻懐中より出玉ふ家内一同皆は大悲の御助けと佛力を皆人奪ひける

第十五番 山城 今熊野

むかしよりたつともしらぬいまの

楠正成
正成當寺の觀音を深く信じ毎日普門品誦經念たり若年のとき赤坂落城せしかば百姓の姿に身をやつし落行く所を敵陣より見詰め長崎勘解由左衛門一矢に射殺さんと切て放つ其矢正成の右のひじに當りしが胸か痛む事なく落延て右の腕をみれば何の跡もなし正成奇異の思をなし懐中の觀音經を開き見れば不思議や一心稱名の御文の處に矢傷甚しくさては觀音大徳われを助け玉かと涙にひせばいよく信心堅固にして一生怠らず尊敬せしとん



第十六番 京清水寺

まつかせやかどはのたきのきよみつを
ひすぶこゝろはすやしがるらん

熊野御前白拍子熊野は常に清水寺の観音とふかく信じ世に名高き美人なり平宗盛御
深く御寵愛なされ晝夜傍を放し玉はす熊野は古郷の母の大病なれども宗
盛御より御暇を下されす心ならずも日を送りしが清水地王の花見を催し
明ふ折から妹頼親母の使にあつまよりはるく来り君に文を捧げ姉の暇
を乞といへ共聞入なく花見の御供に連れられしが姉は一心に大悲をねがひ
一首の歌を詠じけるに宗盛御聞召其場にて御暇被下しも偏に大悲の御恵
みなり

第十七番 京六波羅密寺

おもくともいつつのみはよもあらし
るくはらたうにやいるみなれば

天曆九年の春路中大疫流行して諸人の死難街にみちり市中の悲みいはん
方なく空也上人深く歎きて自ら十一面の像を刻みて車にのせ市中を曳わ
たり信心を進め玉ひしに一度曳し町はどみに癒けり此本尊即ち東山六波
羅密寺これなり又御茶湯をいたゞく者は忽ち疲病治したり此事帝村上天
皇の報聞に達し殊に御信仰ありよつて言例として毎歳元日に佛供の御茶
湯を服し給ふにより下々に至るまで王服と稱し祝し用ゆる例とされり

<p>第十九番 京 草堂</p> <p>東山大工某</p> <p>常に此観音を信し朝夕に参詣いたしけるが丹波笹山に有知の大廻申來りし故急に支度をなしたるに其妻密夫ありて焼飯に毒を入れて殺さんと巧みしを大工夢にも知らず丹波路に來りしに山賊に出わの残らずはぎどられ裸にて姉のかたへ行方始末を語れば甥に角力取ありてその品々をどり返さんと通立行みるに賊は焼飯を喰て死居たりし故殘らずどり戻し滅に菩薩の御誓願を尋みなはく信心せり</p>	<p>第十八番 京 六角堂</p> <p>池坊</p> <p>常寺の本尊は上宮太子七世の御守り佛靈木の太杉一本を以て六角の堂を建玉ふ一人の臣を堂守として附屬し賜ふ即ち池の坊是なり本尊兒と現じ玉ひ花拈花の法を教へ玉ふ是日本立萃活花の始り観音大悲の御傳授にて元祖池の坊より千場未生萃堂遠州郡と流義せらるゝに別れ其大源は六角堂池の坊と今の世に名もたかしこれ大悲の靈驗尊ら事共なり</p>



第二十番

山城 善峰寺

のともすぎやまにむかふあめのらら
よしみねよりもはるゝもふたら

源上人

上人は胎内たないにある時母を苦しめたるに依て不祥の子なりとて山に捨ざし
じ阿知飯あぢいの神守護し玉ふ故鳥獸も害せず村人拾ひあげ十五歳の時叡山に
登りるの後源算上人とてたぐひなき名僧となり母の死を聞き當山に歸り
修行盡しかたし只觀音を信ず是によつて山の神権夫と現じ數多の猪鹿來
りて岩石を平地とす此の事天朝に聞へ佛閣御建立あり上人は百十七才に
て定印を結び寂す容たい變せず越後の弘智法印にひとし

第廿一番

丹波 穴穂寺

かゝるよにひまはであたのめ十こへひとこへ

辰女

龜山金屋某の下女たつは常々觀音をふかく信じけるが其頃世上一般にや
く病流行し此金屋も家内中傳染してわづらひしがていしも見廻るに辰女
の部屋に光明かゝりしを辰に其事を尋ねるに夜な／＼枕邊に賢僧
來り柳の枝にて甘露の如き水を口へ入玉ふ心よきこと見たり何れの御方
なりと尋ね申せば穴穂寺の者なりとて遂に夢の如く覺しが病苦をわすれ
平穩せしは寔に有がたき事大悲の御恵のみなり



第廿二番 攝津 總持寺
おしなへてたかきいやしきうらじいの
はどけのちかひたのまねばなし

山陰中納言

向房卿は六才の御子をつれ西國下向の道にて大龜を救さんとするあり高
乃卿常に觀音を信じ玉へば龜を買取りて放し給ふ其翌日乳母御子を海中
に落しければ御父悲しみ長谷の觀世音を祈り玉ひしに不思議や昨日の大
御子を甲に乗せ參らせ助け來る中納言報恩の志願ならざしを御子志を
ついで唐土より柳橙香の靈木を取寄せ玉ひ大慈悲化の童子に彫刻せしり
玉ふ即ち當寺の御本尊靈驗殊に勝れ玉ふ

第廿三番 攝津 勝尾寺
かまくともつみにはのりのかちとでら
はどけをたのひみころやすけれ

百濟王后

此后は世に聞へたる美人にて國王殊に愛し玉ひしが何なる故にや麻りの
脚にて白髪となりさまく手を盡せども更に暇なかりしが日本攝州勝尾
寺の觀音は靈驗あらたかなるよし夢に見玉ひたうち日本の方に向ひ一
いに祈誓し玉へば不思議や一夜の内に髪は毛直黒にて瑠璃の鬘となりし
かば國王悦びのあまり即日厨文徳揚仁紹の二人を使として阿伽の器金鼓
金鐘等を日本勝尾寺に奉納す今に此寺の寶物なりとぞん



第廿四番 舞津 中山 寺

のをもすきさをもすきてなかやまの
てらへまゐるはのちのよのため

多田藏人の室

藏人幸氏公は常々觀世音を信仰深かりしが其奥方の不信なるを歎き給ひ
ある年の春花見に事をよせ中山へつれ行しに奥方いや／＼ながら本堂に
拜をなし歸らんとせしに綱口の紐頭にまどひ染りまで釣上り正體を失ひ
けるみなみなあわて寺僧をたのみ佛罰を詫げればやう／＼紐だけ歸籠
のうちに其夜中ごろ人心ちとなり彌々恐れ大信者となられ夫婦一世安樂の
身となり給ふ靈驗屢々これを契す

第廿五番 新清 水

あはれみやあまねきかさをしなく
なにをかなみのこゝにさよみつ

陪夫太郎

倍夫太郎は鎌足公入鹿誅伐の御供に參りし留主中に妻は家來大藏と密通
し太郎歸國の後鹿狩をすゝめ出し深山にて害せんと巧しを夢にもしらす
白龍の犬を引て山に入しに大藏王を一矢に殺さんどせしを止め聲を聞き
一命を遺すべしと犬を呼び辨當の飯を與へ我死ば屍を残らず喰ふべしと
いひ聞かせしに犬は直に家來の月のつるを喰切り忽ち咽に喰付かみ殺し
歸宅の後妻をも喰殺したり倍夫菩薩の大慈を頼み犬の爲に此寺を建立す
故に大寺と稱す



第廿六番 播州 法華山
 はるはななつはたちはなあきはさく
 いつもたへせぬのりはなやま
 法道上人
 開基上人は天竺より渡り法華山にて空鉢と云鉢を飛して供養を受る事なり
 或時藤井其禁中の貢米を積で播磨灘を越す上人の鐵鉢飛來り供米を乞
 ん藤井鉢を足に懸しゆる鉢はひなしく歸るに隨ひ千石の米みなく續て
 飛行しに藤井驚き船を上り平伏して詫入れ再び米は空中を船に戻る其
 時一俵道中に落たる所を米陀村と申なり此事觀聞に達し帝より加監を建
 立し玉へるとなる



第廿七番 播州 書寫山
 はるぐどのはれはしよしやのやまおろし
 まつのひいきもみのりなるらん
 性空聖人
 當寺開基の天台智徳の名僧性空は法華三昧を修し玉太時空中に音楽聞へ
 異香くんじ天人性降り庭前の櫻木を禮拜す上人あやしみ其故を尋ね給へ
 ば天人申やう此樹はこれ靈木なり是をもつて觀世音の像を作り末世の衆
 生を濟度せしめ玉へと告て空中にかへる故に聖人此像をもつて自から千
 手の像を刻み我がいはりを一字となし安置し玉ふ是書寫山の開基也



第廿八番 丹後 成相寺

なみのおとまつのひいさもなりあいに
かせふさむわたるあまのはしだて

齊遠禪師

齊遠禪師は觀音を信心深かりしが一年大雪降て十日餘りも人跡絶て既に
既死に及ばんとせし處、狼鹿の足をくはへ來り庭にすて置ぬ禪師は三淨
肉なりと表て喰ふ雪明て里人等食物持來り彼の話を聞て鑄をみるに木屑
のみあり不思議なりと本尊を拜せしかば股より御足迄切さいたる跡あり
僧は我飢を救ひ玉ふかど涙をながし木屑を本尊の股に嘗見れば其儘元の
如く成相玉ふ是に依て成相寺となり

第廿九番 丹後 松尾寺

うのかみはいくよへぬらんたよりをば
ちとせもこゝにまつのをのてら

結城宗大夫

結城宗大夫は毎月參詣せしが或夜浦人と漁船にて悪風に逢ひ悉く
常に馬頭觀音を信じ毎月參詣せしが或夜浦人と漁船にて悪風に逢ひ悉く
魚の餌と成る宗大夫羅刹國に吹流れ此鬼類に喰殺れんとする時一心に
觀音力を念すればふしや忽ち白馬顯れ宗大夫を乗て萬里の海面をかけ
り夢の如く古郷の浦に歸着す妻子諸共其喜びは泣くより白馬は跡を見失
ひ先御禮に當山の觀世音を拜し奉れば御手にかの白馬の手綱と持給へり
宗大夫いよ／＼感涙し弟子となり光心と改め生涯御堂に仕奉ると予開山
威光上人千年松をかんどくの事は御詠歌に



第廿一番
近江 竹生島



第廿二番
近江 竹生島

第三十番 近江 竹生島
つさもひもなみせにうかぶちくふしよ
ふねにたからそつひこしるせよ

仲算上人の兄

此御兄は大慈の化身住僧仲算上人の便ひ給へるに此兄の凡ならざる事を
知りて寵愛し給ひしにふと行衛知れず或時下男山へ遊を取りに行しに此
兄木末に座して法華經を誦す此趣き上人へ告しかば直ちに其處にいたり
對面あり程程をかされたりしに翌年三月十八日空中に音樂聞へたり後に
船中へおちたる者則ち此びわなり上人尊次今に寶物となりてのこれり

第三十一番 近江 長命寺
やちとせややなぎにながさいのちてらん
はこふあもみのかざしなるらん

佐原藤十郎

走は越前者にて深く觀音を信仰し両親を失ひて後ち京都に登るうち志賀
の里にて賊に出合ひ衣類もかねも剽どられ水中に打込れしに此夜波間に
光明かやくも漁師あやしみ網をえかくりしは藤十郎なり常に信仰
の長命寺の御守佛肌身に付けし尊像より光明放ち賜ふゆる靈験生り命助
かりて餘り有難さに此てらの寺子となり堅田むらに堂舎を建てて生がい御
佛に仕へ奉りける



第三十一番 近江 観音寺

第三十一番 近江 観音寺
 あなとふたみちらひたまへくわんおんじ
 とよきくによりはこぶあゆみを
 人魚

第三十三番 美濃 谷汲 波寺

第三十三番 美濃 谷汲 波寺
 いまゝではかやどたのみしかいづるを
 ねきてとさむるみのゝたにくみ
 大倉太郎信満
 信満は奥州の金商人なり常に大悲を深く信ず或時文殊菩薩童子と化して
 靈木の檀木を以て十一面観音の像を造りて信満に與へ玉ふ京都仁和寺に
 於て供養し已に美濃垂井迄來しが御つし重く成りて磐石の如く尊像御つ
 しの中より出給ひ此所に縁の地有りて五里より行き止り玉ふ即ち今の
 谷汲なり太郎は大悲の御心に隨ひ此所に迦藍を建立す尊像の連靈の下へ
 涌出る油にて常燃明なり依て谷汲寺と號すとなん
 世をてらす佛のしるしありければまたともし火もさへすいりけり
 十七

